フィールド(現場)からの風 ⑫④

宮澤守男

「山の日」が国民の祝日になったことで、身近な自然について改めて考えてみませんか

「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」との趣旨で、国民の祝日として8月11日を「山の日」に定める法律が5月に成立し、2016年から祝日となった。

すでに長野県は、独自に「信州山の日」を制定、7月27日に最初の日を迎え安曇野市で制定記念行事が開催された。

大北地域内でも、大町市が「山岳文化都市」宣言を行い、松川村でも5月第3土曜日を「あずみの松川山の日」として制定するなど多くの自治体が独自の条例などで「山の日」を制定している。

日本の祝日は、元日・海の日・体育の日など、現在16日が制定され、他にも一般社団法人・日本記念日協会や一般社団法人・日本記念日評議会などが認定した記念日で、毎日が何らかの記念日となっている状態だ。つくり出された記念日は、大きな経済効果を生じさせているため、今後も確実に増えていくのだろう。

「山の日」を考えたとき「山」とは、何を意味するかと思いフリー百科辞典ウィキペディアで調べると、

「山」とは、周囲よりも高く盛り上がった地形や場所の事を言い、平地と比べて、傾斜した地形から成る。また、地形学では丘陵や台地よりも高度や起伏が大きいものを指す。

ブリタニカ百科事典では、610㍍以上の高さを持つものを山と定義している。これからの「山」を考えるとき、私たちが居住しているエリアそのものを「山」として考える事が大切だと分かる。「里山」と呼ぶ私たちの居住エリアでの発想が「山の日」の中で今後どのように展開されていくのか。私たちを取り巻く自然環境と継続的にどのように付き合っていくべきなのかが、今問われている。

海の日があるから、当然「山の日」の制定は当たり前と考えてはいけない。国民の祝日を目的に、いろいろな分野から祝日制定を求める活動も、今後活発になるだろう。その時に、「山の日」は意義があるから祝日として必ず残そうと国民に理解してもらうには、これからの活動が大切だ。単なる自己満足でない、意識が求められていることを認識してほしい。単なる、誘客やイベントに活用するだけでなく、地域住民に自然を生かす取り組みをどのように展開させるのかの知恵が地域1人1人に求められている。

私も既に他界した父・倉科悦三の影響で若いころ長野県山案内人資格を取得して、山に興味を持った時期があった。父は白馬村山案内人組合長なども務め、山の知識が豊富で、山関係の話をしてくれた。その内容は、故石沢清さんの著書「北アルプス白馬ものがたり」そのものだった。

現在「しろうまだけ」と呼ばれている白馬岳。昔の人は、「西山」と言っていた。地図を作るからという理由で、1人の物知りが知恵を絞って一夜で考えた山の名前だ。白馬岳は「はくばだけ」としても何の問題もないのだが、が口癖だった。

山の名前は同じ山でも、見る方向によって名は異なっていた。村誌「白馬の歩み」でも白馬岳が異なる名で呼ばれていたことが分かる。白馬山荘・白馬岳頂上宿舎・白馬大池・白馬三山・白馬鑓ケ岳などは「はくば」と呼ぶ。理由を関係者に聞くと、白馬山荘の許可を官公庁に届けた際、担当者から「はくば」と指定された事の経過が起因しているとの事だ。

柮(えい)出版社の「白馬オールトレイガイド」でも、白馬村新田で有名な登山家の降旗義道さんも、名前の呼び方に一石を投じる発言をしている。慣れ親しんだ「しろうま」、「どちらかと言うと「代掻き馬」が名づけの理由でロマンを感じるので」、「今更変えるのは困難」と一蹴するのでなく、未来永劫(えいごう)呼ばれる山岳の名前が本当に「しろうま」で良いのか。

今後、ますます国際化は進むだろう。村名をはじめ多くの呼称が「はくば」であれば、一度白馬岳の呼称がどうあるべきか考えても良いのではないだろうか。歴史は、過去を語るだけではあってはならない。創るものであるとの意識が大切だ。住む私たちが、自信を持って語れる歴史を、地域として、どうあるべきか考えてみませんか。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)

山並みがほとんど見られない日が続く今年、里山の大切さが実感できた夏のシーズンでもあった